

詩集『メガロポリス狂想』

(1995年) より抜粋①

佐土原 台介

鉱石の歌声

呵々大笑のあとは水浴にかぎる

歩行する月の波打ち際あたり
うかぶ青銅の球がもえ
怠惰な靴紐が孵化しはじめる
ながれる釦のきれぎれの思索の
思索のきれぎれの
釦の流れの
きれぎれの釦の
流れの
流れる思索の
思索の流れの
風をひきはがす蛇紋岩の哄笑に
液化した模造紙が階段のようにまう
時計からあふれこぼれる銀の睨
じくじくと回転する蛍光灯の溜息の
煮沸された哀願に
しのびよる石灰の叱責が
鍵束の義眼となつてあびせられる
発狂した岩盤をほりすすむ
そそりたつ船 いたるところで
虫ピンが青銅の果肉を食りくらい
壁の荒野に雷雲がはしる
いそいでどけてほしいのだ
羽交いじめにされた湖の門灯を
ひきちぎられた竹の欲望を
身投げした手帳の歯茎を
睫毛の鮮血を
垂直の困惑を
数学を

できるだけ早くひきとつてくれ
髭のはえた向日葵の蝶番を
いなく絨毯に複写された香水よ
欲情する水晶にネジ釘をさしこみ
まいあがる扉を化石で封印する
マダガスカルは樹木のようにとおい
うばわれた海溝に緑の鉛筆がたち
騒々しい輪廻の衣装に
倒錯した宮殿に
陽炎の胸板に
突進するマツチ棒のぬぐいとれた断崖に
策略に
眼底に
太古の眩暈に
渦をまいて岩石がたおれる
不倫のガラスを名指す登山者
秋の鉄骨がぞくぞくと発情している
貝殻の命題は延期された
すりつぶした鉄槌で乱打せよ
季節の哀しみが耳をうめるからには
非行化した額縁を塩水でみたせ
処罰された受話器が熱帯を通過したからには
虹色の緑色計をチタンが作図した
金髪の回虫よ
土星の泡のように集合せよ
異端の竜骨よ
不能のマグマのように帰還せよ
水銀の純潔でふさがれたインク壺に
眼鏡の鉗子が進入する
ボクサーがナイフにのみこまれている
呼吸する生け垣を救助するためには
そのためには
夜明けの撲滅のためには
苦悩する風のためには
不在のためには
そのためには

引き戸の精神 藪の心臓 石灰の胃 吸殻の眼 驚愕の肺 薔薇の肝臓 無花
果の耳

慟哭の手足が必要である

そういうことなのだが鶯鳥諸君

こうして雷鳴の歴史がはじまり

慟哭の物語でとじらる

おお朱にそまつた純白の黄金！

未 成

The Before Being

否定の否定は否定である！

それは石ではなかった
石と名付けられたあるものでもなく
石とよばれるようになる以前のもの
圧縮されていて断絶的で
鉱物性原素の集合体の
夢幻的混沌とでもいうべきもの
ものという形になるはるか以前の
状態ですらない始源であつた

それは水ではなかった
たえず流動していて形をなさず
たまるかとおもえば拡散し
純粹な透明でいてすきとつていず
ぬらし あらい のむという
どんな作用をもとらすことなく
真空状態の旋毛風つむじかぜといったふうに
螺旋をまいてなめらかに移動し
隙間という隙間に浸透してゆき
みたすと同時に無となり
痕跡をとどめるといふことがない

それは火ではなかった
もえあがる炎はなく 熱もなく
ふれるだけで瞬時にやきつくし
それも同時に消失し
灰をのこさず 煙をたてず
ゴオゴオと空気をよびこむ
炎熱のすさまじさは微塵もなく
風のようにさわやかにみえ 形はなく

いつさいの音はなく　こがす臭いもない
火の作用の過程をへることなく
すんだ口笛のようにさりげなく
跡形もなくもやしさつてしまう

それは風ではなかった
およそ移動するということがなく
あらゆる場所にみちていて
存在をかんじさせるいかなる兆しもなかった
陽光もないのに風景をかがやかせ
風の湖面に漣をつくり
気流に左右されず
酸素もオゾンも成分にもたず
むろん窒素でも水素でもなく
通過しながら静止していた

それはどのようなものにもていなかった
イメージや観念でとらえることはできず
言葉で表現できないあるもの
ものとよばれたときから形をくずし
視覚や観念からたちまちのがれさつてしまう
飛翔していて眼にはみえず
はためきながら音をたてず
額の眼による視野もおよばず
否定形によってしかかたることのできない
存在以前の絶対的眺望といったもの
新しくもなく　古くもなく
偏在のほのかな予感をただよわせ
かぎりなく遠くにあつて身近なもの
あらゆる努力をむなしものにし
同時に力強い精気の源であり
あたえながらにしていこう
結果をもたらすということがない

だから　それは
虫でも草でもなく

樹木でもなく

太陽 月 星 エーテルでもなかった

宇宙でも無のなかの有でもなく

神でもなく仏でもなく造物主でもなく

存在の原理ですらなく

いつさいの^へある^ミことをこばみ

いつさいの成分であることはなく

眼の動きではとらえられない

光輝の移動にもにて

たえず運動していながら どのように

精密な機器でも補足することができない

あらゆる状態 作用 形の原型であり

始源にして終末である

自己完結した 不可知の未成

それはたぶん無ですらなく 永遠に
名をもつことができなかった